



# 第1章 夜の

## 始まりへ

### 1・1

暗闇はひどく人を不安にさせる。未だかつてない、これほどまでに明るい夜を手に入れた私達でも、その恐怖は変わらない。この世界から、浮き上がってしまったような居場所のなさ。そんな夜に、しつとりと落ちてくる雪は、これが夢の

続きであるような錯覚を与えてくれる。

でもこれは現実だ。絶対的な証拠はどこにもないが、この肌を刺す風が、口から吐き出る白い息が、確信させてくれる。

たった数メートル地面から離れただけで、駅の連絡橋の上は凍え死んでしまいそうなくらい寒いし、心細い。うつ伏せになって、もう一時間ほどは経っている。

待ち続けるだけというのは、かえって神経をすり減らしていくのだ。

傍らに横たわる、黒く重たい塊。やけに長い。狙撃銃というものか。あまり詳しくないからよくわからないけれど、信用できる強さを感じる。私はこれで、いずれやってくるであろう獲物を、仕留めなくてはならないのだ。もちろん、銃を

撃ったことも、握ったことも、そもそも今まで本物を見たことすらなかった。それでもやらなければならないという緊張は、凄まじかった。

—— 悴む手が携帯で震えた。いきなりの音と振動に、心臓がすこしドキッとなった。アヤメさんからの電話がかかってきたのだ。ポケットから取り出して、私は電話に出た。

「もしもし、聞こえる」

「はい、聞こえます」

当然のことだけど、確かめておこうと決めていた。この夜のなかでは、普通であることすらも心強い。

「良かった。それじゃ確認するわね」

「はい」

「いま、瀬玲奈ちゃんと一緒にアイツを追いつめてるところ。結構すばしくて、もう少し時間がかかるかもしれない」

片手間にスコープを覗き込む。確かに動く影は一つもない。

「だから、慌てないでいいから」

「了解です」

「それじゃあ、準備お願いね。それと

—— 「呼吸を整える間の後」—— 余計なことは考えなくていいから。自分ができるんだぞ、って思い込めば案外なんとななるって、さっき言ったでしょ。本当にその通りだから。自分を信じれば、後はあの子達がバックアップしてくれる。自分を信頼して。本当に、それしかないから」

大人びて、けれど柔らかい声は、とても大きな心の安らぎを与えてくれる。

「はい、わかりました。……信じてみま  
す。自分を」

だけどその返事から、自信のなさがにじみ出ていることぐらい、自分でもわかって  
いた。

「うん、じゃあ、頑張って」

電話は切れた。

静かな暗闇で、私は彼女の言葉を反芻する。先の言葉は、彼女が本当に、たった二年ほど早く生まれてきただけなのかを疑いたくなるぐらいだ。でも彼女は私の想像を超える出来事を、今までずっと、たった一人で乗り越えてきた人なんだ。だから、こんなにも強くて優しくなれる

んだろう。身勝手な納得だけれど、私はそれで満足した。

だから後は自分のやるべきことをするだけ。

そう覚悟して、私は時を待った。

## 1・2

### (1)

酷い目覚め。悪い夢を見ていた。何か心の奥底から這い上がってくる、得体の知れない恐怖に顔を叩かれたような気がした。枕を見れば、汗でぐっしりと濡れていた。いくら寒くて毛布を三枚重ねて寝ていたからといって、こんなにも汗をかくなんて。窓を見ても、まだ外は真っ

暗だった。時計は午前五時前。カチカチとなる秒針の音。二度寝しようにも、もう一度あの夢を見るのかと思うと、寝られなかった。

なのに、肝心の内容は何一つ覚えていなかった。

## (2)

結局、目が覚めてからずっと、ただ布団に包まっていただけだった。薄っすらと明るくなってきた空を見て、私は一階へ降りた。

「おはよう、華南<sup>カナナン</sup>」

いつものことだが、お母さんが弁当を作っていた。

「うん、おはよう」

適当に返事をして、顔を洗う。冷たい。だから冬は嫌なんだ。冷たさは痛い。でもお湯が出るのを待つのも面倒だし、結局我慢する。

けれど、それのおかげで目も覚めた。

髪を整えて、制服をハンガーから取って、そのままストープの前を占領する。

パジャマを脱いで、直に肌に当たる熱は、すこしピリピリした感覚だから、長くは当たってられない。寒いし痛いしで、だからだと着替える暇はないのだ。

「お母さん。体操服どこ」

パジャマを洗濯物のかごに入れて、ついでに干してあるはずの体操服を探したが、見つからなかった。

「ええ、しらんよ。どっか棚に入っていない？」

「棚？」

お母さんはいつもそんな手間のかかることとはしない。基本的に自分の服は自分で片付けるのが、我が家の暗黙の了解だった。だから、まさかとは思いつながら、下着やら靴下しか入っていないはずの、姉妹共用の引き出しを漁る。

「あ、あった」

ぐちゃぐちゃに丸められて、無理矢理に押し込まれていた。しわしわなジャージ。お姉ちゃんの仕業だ。間違いない。こんながさつなのは、この家では姉しかないのだ。でもなんで……。

まあ、どうでもいいか。

カバンをとってくるために、二階にまた上がろうとする。その時「華南、ついでにお姉ちゃん起こしてきて。もう時間だぞって」

お母さんからの指令が飛んできた。

こんこん、ノックをしても反応はない。

「お姉ちゃん、朝だよ。起きて」

扉越しでも十分に聞こえると思う大きさで言ってもても、起きてくる気配がない。仕方なく、入ることにした。

「入るよ、お姉ちゃん」

ひどい寝相。ベッドから体の半分が飛び出ている。

「ほら、起きて」

ぱっと、布団をはがす。あああああ、と呻く姉。

「あ、それ、私の体操服じゃん」

あそこに体操服があったのは、お姉ちゃんが使ってたからなのか。

「ねむい」

「眠いじゃない。起きて。仕事でしょ」

「まだ冬休み」

「うそつかないですよ。あと、なんで私の服着てるの？それパジャマじゃなくて体操服なんだけど」

「使ってたから」

「使います」

「それは今日からでしょ」

「ああ、もういい。ちゃんと降りてきてよ」

うんうんと適当に返事をされれば、あまり気持ちは良くない。

ああ、冬休み明け初日から、なんだか嫌だな。

### (3)

忘れ物は、ない。ポケットやバッグの中を何度も確かめて、お弁当もしっかり持った。経験上、長期休暇明けは忘れ物が多い。小学校の頃は雑巾だったり、中学校のときは教科書だったり筆箱だったりで、大変な思いをしてきたのだ。

「いってきます」

「いってらっしゃい」

洗い物をしながらお母さんは返事を返してくれたが、お姉ちゃんからは何も無い。テレビを見るだけだった。

はあ、寒い。

まだ薄暗い朝。

人通りも少ない道。

凍結した道路で滑りそうになるが、ころうじて回避できた。夏だったら駅まで自転車に乗って行けたのだけれど、冬は歩きで行くしかない。冬休みをぐーたら過ごしていたせいだろうか、少し歩いただけでも疲れる。

十分ほど歩いて、駅に着いた。それと同時に、駅から大勢の人が出てくる。向こうからの電車が到着した合図だった。バス停に向かう人の流れをかくぐりながら、私は改札をくぐり、エスカレーターに乗って、駅のホームに上った。

エスカレーターを降りて左側に止まっ

ている電車に乗る。出発時刻は7時40分頃。今の時刻は25分頃。この時間帯に来れば、確実に席に座れるのだ。駅から近いところに家があるから、もつとゆつくりしてもいいんじゃないかと、よく言われる。でも家にいて時間を潰すのも、ここで座って待つのも大して変わらないのだから、早く来ているのだ。

いつもの席、立ち上がる時のことを考えて、私は通路側の席に座ることにしている。窓側に座ると、席を立つために通路側の人の足を避けないと行けないし、そのときに足と足がぶつかったりするのが、気まずいのだ。幸いに誰にも座られていなかった。車両の先頭から数えて、二つ目の出入り口が、ちょうど到着駅の



ホーム階段の目の前になる。ここに座ればスムーズに降りることができて、列に巻き込まれることがない。目の前の人の足の遅さに、イライラせずに済むのだ。断っておくが、私はせっかちなわけではない。他人の歩調に束縛されるのが嫌なだけなのだ。特に朝は。

何人かの乗客だけで、その殆どは高校生だ。みんな手元に集中している。私もそうだ。入学当初は、文庫本を読んでいたが、今では携帯を触っている。段々と、取り出したりするのが面倒になったり、少し周りの目が気になってしまったのだ。自分だけ本を読んでいる疎外感。感じなくてもいいものを、感じてしまったのだ。

ふと時計を見るとすでに40分になっていた。乗り換えの人たちで、いつの間にか車内はいっぱいで、少し窮屈。がたと、音がなった。電車が、動き出した。動き出してからもう10分ほど経った。二つの駅を過ぎて、そろそろ私が降りる駅に着く。

バイブレーション。通知がきたのだ。携帯のロックを外す。誰からなのかは検討がついている。セレナだ。

『おはよー』

『いまおきた』

いつも彼女はこうやっていちいちメッセージを送ってくる。友達がいつ起きたとか、あまり興味はないから、いつも無視している。まあ、あっちもそれを承知でやつ

ているのだろうけど。

揺れる電車。ちらほらと立ち上がる人は、おそらくその殆どが同じ学生だろう。

私も携帯をしまつて、右の扉の前で待つ。

甲高い音を立てて、電車は止まった。

『開く』のボタンを押して、私は電車を

降りた。階段を登って、連絡橋を渡って、

降りて、改札をでる。

冬の空。

寒い。

ここから15分ほど、学校まで歩く。

駅を出て左に行く。少し前の、富山方面から来たであろう人たちを越していく。

程なくして、脇道に入る。ここまでくれば、人も少なくなる。途中、何人かの人に抜かれながら、やっと学校の目の前ま

でたどり着く。しかし、ここからが問題

なのだ。玄関までの坂道。しかもかなり

の傾斜があつて、登るのも一苦勞。坂を

登り終わった後は、羽織っているコート

が邪魔に思えるほどの、じんわりとした

汗をかきながら、四階の教室を目指す。

やっとこさ、私は教室にたどり着いた。

「おはよう」

返事を返してくれるのは、耳の空いてい

る二人ぐらい。そもそも人の少ない朝の

教室は、驚くほど静かだ。みんな携帯で

動画を見たり、音楽を聞いたり、ゲーム

をしたりしている。私もその一人だ。

ちょうど真ん中らへんの机が、今の私

の席だった。前過ぎず、後ろ過ぎない、

先生の目も手薄な席で満足している。

バッグを机の横にかけて、席に座る。教科書や筆箱を取り出して、環境を整える。

あとは、8時50分の一コマ目の開始時間まで、また携帯で暇つぶし。音楽の趣味はないので、もっぱらゲームかニュースの閲覧。イヤホンを取り出して、ジャックに差し込む。両耳を塞いで、ゲームを始める。最近では周りの影響もあって、リズムゲームをやっている。面白いのか面白くないのかよくわからないが、キャラクターが魅力的なのでやっている。けれど肝心の才能は、これっぽちもないのであった。

何曲かやり終わった後、チャイムが鳴った。五分後には、またチャイムが鳴って授業が始まった。国語の授業。内容は、

現代文。一コマ90分は、やはり長い。

一つの科目で普通校の二時間分を潰すのは、無理があるのではないか。時折、というか最近はその愚痴を吐きたくなる。

結局、ぼーっとしている間に授業は終わってしまった。

### (3)

二コマ目の数学。数学それ自体は、あまり得意でもなく不得意でもない。なんと言うか、平均点の少し上をふらふらしているという感じだった。組み合わせ、順列の授業。□や○やら新しい記号がどんどんと導入され、こんがらがってしまった。わかりやすくするために、板書をマー

カーペンで色分けする。どんどんと出来上がってくるノートに、私はほんの少しの満足感を味わう。段々と、中学から先の、高校の勉強だという感じが出てきた。

けれど授業は単調というか、端的というか、とくに過不足のない教科書通りなもの。しかも、いかにも寝てくださいと言わんばかりのもの。柔らかな先生の声のせいで、時たまに居眠りをしてしまう。

まさに今、まぶたは重く、閉じかかっている。早起きのツケが回ってきたのだ。

耐え難い睡魔が私を襲う。締め切った教室の、こもった空気。汗ばむ熱気。頭が、沈む。

……。

……。

「起きてください」

肩を叩かれた。私はとっさに顔を上げて、

「あ、はい、起きてます」と言った。足

音が遠ざかる。また眠気が。目がシヨボ

シヨボしてきた。抗えない。教科書を盾

にしてごまかそうとする、そんな余裕す

らなかった。だからもう生理現象なのだ

からしょうがないと、半ば開き直って、

もう寝てしまおうと思った。ほんの五分

だけ。そう決めた。

うとうと。

ウトウト。

「起きてください」

また頭上で声がする。

「起きてください」

段々と大きくなる。

黙って顔をあげる。目は閉じたまま。それでも、先生は起きたと判断したのだろう、前に戻っていく。机に突っ伏す。限界だった。どうしてこんなにも眠たいのだろうか。考えることもできない。

眠い。眠い。眠い。ねむい。ねむい。

ねむい。ねむ……。ね——。

「起きてください」

起きて。

起きなさい。

起きろ。

起きます。

「じゃあ、詠さん。前に出て答えを書

いてください」

詠華南——私の名前。呼ばれるまま

に、前に出る。ふわふわとした意識が、足

元をふらつかせる。教壇を上がり、チヨ

クを持って黒板の前に立つ。深い緑色。

なんだか薄くなっていく。

「じゃあ、そこらへんに答えを書いてください」

答え……そもそも問題が分からない。

「えっと」

前の席の人に見せてもらおうと思った。

後ろを振り向く。

ざわざわと音が聞こえるだけだった。

「えっ、ここ、どこ」

思わず口から溢れる。

——。

しばらくの内、やっとここがどこか理解できた。

学校の裏の竹林だ。

確かに、円柱の数々は微かに茶色がかった緑色をしていて、先端には葉っぱみたいなものが付いている。でもただそれだけだった。クラスメイトも、先生も、教室も消えて、雪の被った竹林にただ一人。

ざわざわ。

ざわざわ。

ざわざわ。

ざわざわ。

葉の擦れる音。だんだんと大きくなってくる。私を取り囲むように、反響して増幅して交響していく。うるさい。うるさすぎる。耳を塞ぐ。塞いでもまだ聞こえる。耳と手の、ほんの僅かな隙間から入り込み、外耳の中で増進していく。息が荒い。なぜか焦りを感じている。

怖い。

耐えられなくて、私は叫んだ。

「誰かいませんか」

何度も、何度も、喉が破れるくらいに大きな声で。けれど何も帰ってこない。ざわざわとうるさいだけ。なんで。なんなんのこれ。誰かどうか、どうか返事をください。

「起きてください」

聞こえた。確かな人の声。

「起きてください」

起きている。私は起きている。

目は覚めている。これほどまでにはつきりした意識を感じたことは、ないかもしれない。

それとも夢なのか。

分らない。

ほっぺをつねってみる。

——痛い。

「起きてください」

真後ろから聞こえる。

私は、振り向いた。

「起きてください」

真つ白な世界に、真つ黒でまんまるな、

影があるだけだった。

ああ。

あああ。

ああああ。

アアアアアアア——。

「あつ」

「それじゃあ、詠さんに……ああ、お休

み中ですね。じゃあ——」

紛れもない先生の声。目が覚めた。汗で

ノートが濡れていた。ゆっくりと顔を上

げて、周りを見つめる。何も変わってな

い。あの風景は、結局夢だったのか。で

も、あんなにも現実味を帯びた夢、記憶

にこびりつくような夢は、今まで見たこ

とがなかった。額に手を当てる。少し熱

いが、風邪を引いているほどではない。

ぐったりとした体。

時計を見れば、後少しで授業は終わり

そうだった。

(4)

チャイムが鳴った。一斉に立ち上がる

みんな。私も立とうと思ったが、なんだ

かふらつくし、少し落ち着いてからにしようと思った。

「おーい」

聞き慣れた声がする。教室の後ろのドアから身を乗り出して、セレナが私を呼んでいた。

「ごはん、いこ」

うん、と返事をして、一度深呼吸をして、バッグから弁当箱を取り出して、彼女の方へ向かった。セレナはいつも弁当じゃなくて、学食で昼ごはんを食べている。だから私は彼女に付き合って、一緒に食堂でごはんを食べる。食堂は一旦外に出ないと行けない。薄暗い廊下を歩いて、階段に向かおうとする。バカ騒ぎしている男子の、いくつかのグループをかき分

けて、私達は前に進んでいった。

「あ、セレナ、トイレ行ってきたもいい」

「うん、わかった」

やっぱりあたしも行くと、一緒についてきた。

「なんか顔赤くない」

セレナが聞いてきた。

「えー、そうかな」

鏡を見て確認する。そんなに赤いかな、と思っていたら、セレナが何かに気づいたような顔をした。「あ、よだれ付いてるじゃん。居眠りしてたんだ。あれれー、居眠りはしないものなんじゃないの?」私のほっぺをグリグリしながら、セレナは笑った。手洗いしたての手についた水が冷たい。



「セレナが言えることじゃないでしょ。寝すぎて怒られた人に、言われたくない」  
「私はしょうがないの。バイトしてるから」

「学生でしょ。本分は勉強。私は、勉強しすぎて疲れて寝ちゃったの。私のほうがエライ」

「はあ、もうそんなことで偉そうぶるなんて、子どもだな、カナンくんは」

確かに、私の言葉は子供じみていた。だから、私達は笑いあった。

「はいはい。じゃあ行こう」

ハンカチで手を拭きながらトイレを出て、階段を降りて、私達は校舎をでた。

セレナはうどんを持ってきた。安いが、

それ相応の味らしい。

「そういえば、カナンってなんか夢とか見るの？」

「なに急に」

「いや、居眠りするってことは、夜に寝られないってことでしょ。ということは、怖い夢とか見るのが嫌だとか、そんな感じかなって。」

初めてこんな場所まで来た。学校の裏、

夏のプール授業の時に来ただけで、どうなっているのか今まで分からなかった。

フェンスを飛び越える。スカートが引っかかて、セレナにもたれかかる。「大丈夫

夫？」

「うん、大丈夫」

そう言ったけれど、自分の顔がどれほど  
暗い顔をしているのかを、いますぐ見て  
みたい。きつと真つ青だ。暗く淀んでい  
るはず。

でも今更引き返す訳にはいかない。引  
き返せないのだ。恐怖と同時に私の心を  
かき乱す、底知れぬ好奇。

セレナの腕を掴む。二人一緒に、農道  
らしきコンクリートの道をそつて歩いて  
いった。所々に落ちてゐるタバコの吸殻。  
ここが隠れた喫煙所であるという噂は、  
かなり有名だった。日当たりも悪くて、  
しかも冬だ。あたりは薄暗く、気味が悪  
い。伸び切った雑草と、整備のされてい

ない道。急になる坂道を登った先、なに  
か小屋らしき建物を見つけた。

その先は完全に藪。

セピアな景色。

立ちすくむ。

「ねえ、カナン。帰ろうよ。こ入ったら  
ダメなんじゃないの。誰かの土地だよ。

不法侵入だよ！」

彼女の声は、耳に入っている。だけど、  
頭の中には入ってこなかった。あの時と  
同じだった。ざわざわとうるさい。これ  
も夢の中なのだろうか。明晰夢の中に居  
るような、居心地のもどかしさ。

「ねえ、あれ、ヤバくない？ヤバイつ  
てホントに、ねえ、ねえ」

瀬玲奈が指差す方向には、恐ろしい物が

漂つていた。まるで抽象画の世界からひょっこり出てきたような化物。緩やかな楕円と鋭利な三角形が組み合わさった胴体に、波動のように幾何学的な模様が絶えず動き回って、眼が痛い。そして、現実離れた異型からとどころ生えたヒトの手足。ただそれが纏う現実感だけが、紛れもなく今襲いかかる、私達の危機的状况をまじまじと誇張してくる。

「華南、ねえ華南！」

なんだろう、何も言えない。返事をしたくても声が出ない。足が動かない。金縛りにかかったように、自分の意志で体を動かすことができない。それに目が離せない。あの異物から瞬きすら拒ませる何かを感じる。

「ねえ華南、華南！逃げよう、逃げるんだよ！」

張り詰める言葉と共に化物はこちらに歩み寄ってくる。歩いているのか走っているのかも分からない歩幅で、しかし確実に私達を捉えながら。

「どうしちゃったの華南！ヤバイよあれ、早く、早く！」

ダメだ、何も出来ない。本当に何も出来ない。震える脚は歩くことを忘れて、しまいには立つことすらままならない。怖い、怖い怖い怖い、怖いよ、誰か助けて。いつしか目の前にはどこからか開いた大口。

ああダメだ。そう観念したその時。

背後から飛び込んできた人影が、怪物

を、その恐怖を、彼方へと吹き飛ばして  
行つた。見慣れない格好をした人は、そ  
のまま追撃の手を緩めることなく、手に  
した得物——刀だろうか——で化物  
を薙いでいく。一撃、また一撃と共に、  
夜空に響く嬌声は人の物ではなく、喩え  
るならばノイズがかつたラジオのようだつ  
た。——そして、いつの間にか戦いは  
終わり、静かに消えていく化物の骸、清  
廉とそれを目視する女性の姿を最後に、  
この怪異は幕を閉じた。